ご挨拶

理事　銘苅　桂子

沖縄県医師会会員の皆様、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

このたび、沖縄県医師会の理事を拝命いたしましたことのご報告とご挨拶をさせていただきたいと存じます。主に勤務医・女性医師部門、母子保健･母体保護部門、組織強化や若手の会、琉球大学病院移転対策を担当させていただくことになりました。田名会長が沖縄県のためにご自身に課している使命、熱い想いに触れ、その一端を担わせていただくこと、その役職の大きさに身の引き締まる思いでございます。

那覇市小禄の出身で、小禄小学校、金城中学校、開邦高校と歩んで参りました。小学校低学年の時に父親が大病し、長期の過酷な闘病生活を経て命を救っていただきました。親戚の家に預けられ、さみしかったクリスマスの時期が思い出されます。中学生の時には認知症の祖母を介護し、毎晩徘徊する姿、孫の顔を忘れて暴言を吐く姿に傷心しておりました。大学生のときには母親ががんを患い、医学生でありながら何もできない自分をむなしく感じました。その後6年生の時に娘を出産し、様々な女性の痛みに寄り添える産婦人科医になることを決意しました。あれから四半世紀がたち、家族のサポート、多くの指導者、応援者、良き同僚に恵まれて今の自分があります。その間、女性医師増加による医師不足の加速、産婦人科医局員激減時代、産婦人科医療崩壊の危機、女性医師支援から働き方改革への変遷と時代の波にのまれながら、自分のできること、自分に求められていることを、正直に言葉を選べば、逃げずに行って参りました。

専門は生殖内分泌医療（不妊治療やがん生殖医療）、腹腔鏡手術、女性のヘルスケアであります。特に、小児･AYA 世代の妊孕性温存療法（小児や若年がん患者さんが、がん治療前に卵子や卵巣、精子を凍結しておき、がん克服後にこどもを授かることを目指す生殖医療）は、沖縄県でがん治療を行っている病院とのネットワーク形成を行い、紹介いただく患者さんは着実に増加しております。また、婦人科子宮悪性腫瘍に対する腹腔鏡手術やロボット支援手術は沖縄県では唯一琉球大学病院のみで行える低侵襲手術として導入して参りました。それと並行し、これまで16年にわたり沖縄県女性医師部会において女性医師支援の活動をさせていただきました。現在では女性医師を支援するという考えは改められ、働き方改革によって男女が共に働きやすい環境を作ることが求められています。

一方、琉球大学病院では、がん診療、稀少・難治性疾患、複数の合併症を有する患者さんなど、沖縄県における医療の最後の砦となって多くのスタッフが働いています。また、診療のみならず医学生、研修医、専門医の教育、さらには研究、地域への医師派遣まで、医師は身を削って従事しております。大学病院をサステイナブルとすべく、働き方改革と大学改革プランの実施、マンパワーの確保は喫緊の課題です。さらに、琉球大学病院の西普天間への移転、こども真ん中ウェルビーイングセンター構想の実現など、与えられた課題のどれもが難題となっております。これら難題に向き合う琉大病院医師として、田名会長率いる新体制の中で沖縄県医師会との架け橋となること、沖縄産科婦人科学会、沖縄県産婦人科医会、沖縄小児科学会はじめ多方面の方々の力を借りてこども真ん中ウェルビーイングを実現すること、沖縄県の女性医師の活躍がすすみ、女性管理職が倍増することを目標に尽力して参ります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。